

政談十二社

泉鏡花作

—

東京もはや此處は多摩の里、郡の部に屬する内藤新宿の町端に、近頃新開で土の色赤く、日當のいゝ冠木門から、目のふちほんのりと酔を帯びて、杖を小脇に、束々と出た一名の瀟洒たる人物がある。黒の洋服で雪のやうな胸、手首、勿論靴で、何ういふ好みか目庇のつつと出た、鐵道の局員が被るやうな形なのを、前さがりに頂いた、之にてら／＼と小春の日の光を遮つて、やゝ蔭になつた頬骨の些と出た、目の大きい、鼻の隆い、背のすつくりした、人品に威嚴のある年齢三十ばかりなるが引緊つた口に葉巻を銜へたまゝで、今門を出て、刈取つたあとの蕎麦島に面した。

この島を前にして、門前の徑を右へ行けば通へ出て、停車場へは五町に足りない。左は、田舎道で、先づ近いのが十二社、堀の内、角筈、目黒などへ行

くのである。

見れば青物を市へ積出した荷車が絶えては續き、街道を在所の方へ曳いて歸る。午後三時を過ぎて秋の日は暮れるに間もあるまいに、停車場の道には向はないで、却つて十二社の方へ靴の尖を廻らして、衝と杖を突出した。

然も此の人は牛込南町邊に住居する法官である。去年先づ検事補に敘せられたのが、今年になつて夏のはじめ、新に大審院の判事に任せられると直ぐに暑中休暇になつたが、暑さが厳しい年であつたゝめ、瘦せるまでの煩ひをしたゝめに、院が開けてからも二月ばかり病氣びきをして、静に療養をしたので、頃日ではすつかり全快、そこで届を出してやがて出勤をしようと謂ふ。

丁度日曜で、久しぶりの郊外散策、足固め旁々新宿から歩行いて、十二社あたりまで行かうといふ途中、此の新開に住んで居る給水工場の重役人に知合があつて立寄つたのであつた、これから。

名を由之助といふ小山判事は、埃も立たない秋の空は水のやうに澄渡つて、彼方此方蕎麥の莖の西日の色、眞赤な蕃椒が、一團々々ある中へ、口にした其の葉卷の紫の煙を軽く吹き亂しながら、田圃道を楽しさう。

其の胸の中も又察すべきものである。小山は固より醫者が厭だから文學を、文學も妙でない、法律を、政治をといつた側の少年ではなかつた。

然れば法官が其の望で、就中希つた判官に志を得て、新たに、はじめて、其方は・・・と神聖にして犯すべからざる天下控訴院の椅子にかゝら、うとする二三日。

足の運びにつれて目に映じて心に往來するものは、土橋でなく、流でなく、遠方の森でなく、工場の煙突でなく、路傍の藪でなく、寺の屋根でもなく、影でなく、日南でなく、土の凸凹でもなく、却つて法廷を進退する公事訴訟人の風采、倂、伏目に我を仰ぎ見る囚人の顔、辯護士の額、原告の鼻、検事の髻、押丁等の服装、傍聴席の光線の工合などが、目を遮り、胸を蔽うて、年少判事は此の大なる責任の

ために、手も自由ならず、足の運びも重いばかり、
光つた靴の爪尖と、杖の端の輝く銀とを心すともな
く直視めながら、一歩進み二歩行く内遽に颯と暗く
なつて、風が身に染むので心付けば、樹蔭なる崖の
腹から二頭の龍の、二條の氷柱を吐く末が百筋に亂
れて、ドツと池へ灌ぐのは、熊野の野社の千歳經る
杉の林を頂いた、十二社の瀧の下路である。

「何か變つたこともないかと瀧に臨んだ中二階の小座敷、欄干に凭れながら判事は徒然に茶店の婆さんに話しかける。

十二社あたりへ客の寄るのは、夏も極暑の節一盛で、やがて初冬にもなれば、上の社の森の中で狐が鳴かうといふ場所柄のさびれさ加減思ふべしで、建廻した茶屋休息所、其節は、ビール聞し召せ枝豆も候だのが、唯葦簀の屋根と柱のみ、破の見える床の上へ、二ひら三ひら、申譯だけの緋の毛布を敷いてある。其掛茶屋は、松と薄で取廻し、大根畠を小高く見せた周圍五町ばかりの大池の汀になつて居て、緋鯉の影、眞鯉の姿も小波の立つ中に美しく、こぼれ松葉の一筋二筋にるやうに水面を吹かれて渡るのも風情であるから、判事は最初、杖を此處に留めて憩つたのであるが、眩いばかり西日が射すので、頭痛持なれば眉を顰め、水底へ深く入つた鯉とともに其の毛布の席を去つて、間に土間一ツ隔てた其なる母屋の中二階に引越したのであつた。

中二階といつても唯段の數二ツ、一段低い處にお
幾といふ婆さんが、鹽煎餅の壺と、駄菓子だぐわしの箱はこと熟
柿くしの杖さるを横よこに控ひかへ、角火鉢かくひばちの大おほきいのに、眞鍮しんちゆうの藥罐やくわん
から湯氣ゆげを立たせたのを前まへに置おき、煤すすけた棚たなの上うへに
古ふるぼけた麥酒ビールの瓶心びんところん太さびの皿さらなどを亂雜らんざつに並ならべたのを
背後うしろに背負せおひ、柱はしらに安煙草やすたばこのびらを張はり、天井てんじやうに捨すて
團扇うちはをさして、此處こゝまでさし入いる日ひあたりに、眼鏡めがね
を掛かけて繼物つぎものをして居ゐる。外ほかに姉ねえさんも何なんにも居ゐない、
盛さかりの頃ころは本家ほんけから、女中料理人ぢよちゆうれうりにんを引率いんそつして新宿停車
場前ヨシマへの池田屋いけだやといふ飲食いんしよく店てんが夫婦ふうふづれ乗込のりこむので、
獨身ひとりみの便たよりないお幾婆いくばあさんは、其その縁續えんつづきのものとか、
留守番るすばんを兼ねかねて後生ごしやうのほどを行おこなひ澄すますと謂いふ趣おもむき。

判事はんじに浮世うきよばなしを促つなされたのを機きにお幾いくは弗ふと
針はりの手てを留とめたが、返事へんじより前まへに逸疾いちはやく其その眼鏡めがねを
外はづした、進すすんで何なにか言いひたいことでもあつたと見みえ
る、別べつの吸子きぶすに沸たぎつた湯ゆをさして、盆ぼんに乗のせると其それ
を持もつて、前垂まへだれの絲屑いとくづを拂はらひさま、靜しづかに壇だんを上あつて、
客きやくの前まへに跪ひざまいて、
「お茶ちやを入替いれかへて参まりました、召上めしありまし。」「
といひながら膝ひざ近く躡にじり寄よつて差置さしおいた。

判事は欄干について頬を支へて居た手を膝に取つて、

「おほ、其は難有う。」と婆の目には、もの珍しく見ゆるまで、恚る紳士の優しい容子を心ありげに瞻つたが、

「時に旦那様。」

「むゝ、」

「まあ可哀さうだと思召しまし、此の間お休み遊ばしました時、一寸参りました彼の女でございませうが、御串戯ではございませうが、旦那様も佳い女だな、とおつしやつて下さいました彼のことです。但すがね、」

と言ひかけて一寸猶豫つて、聞く人の顔の色を窺つたのは、恚ういつて客が此のことについて注意をするや否やを見ようとしたので。心にもかけないほどの者ならば話し出して退屈をさせるにも及ばぬことゝ、年寄だけに氣が届いたので、案の如く判事は聴く耳を立てたのである。

「おほ、何うかしたか、本當に容子の佳い女だ

よ。」

「はい、容子の可愛い女で。旦那様は都で被在しや
います、別にお目にも留りますまいが、私どもの
目からは宛然もう辨天様が小町かと見えますほどで
す。其に深切で優しいおとなしい女でございました、
彼で一枚着飾らせませうれば、上つ方のお姫様と申し
ても宜い位。」

「ほゝゝ、賞めまするに税は立たず、これは柳橋も新橋も御存じで被在しやいませう、旦那様のお前で出まかせなことを失禮な。」

小山判事は苦笑をして、

「串戯をいつては不可ん、私は學生だよ。」

「あら、あんなことをおつしやつて、貴方は何ぞの先生様で被在しやいますよ。」

「まあ其の娘が何うしたといふのだ。」

と小山は胡坐をどつかりと組直した。

落着いて聞いてくれさうな様子を見て取り、婆さ

んは嬉しさうに、

「何にいたせ、些でもお心に留つて居りますなら可哀さうだと思つて遣つて下さいまし。恚うやつ

てお傍でお話をいたしますのは今日がはじめて。私

どもへお休み下さいましたのは唯た二度なんだから

いますけれども、他に誰も居りませず、丁度那の娘

が來合せました時で能くお顔を存じて居りますし、

其に恚う申しては如何でございますが、旦那様も那の娘を覚えて被在しやいますやうに存じます。之も佳い娘だと思ひまする年寄の慾目、人ごとながら自惚でございませう、其で附かぬことをお話し申しますやうではございますけれども旦那様、後生でございます、可哀相だと思つて遣つて下さりまし。」「と繰返して又言つた。恚く可哀相だと思つて遣れと、色に憂を帯びて同情を求めること三度であるから、判事は思はず胸が騒いで幽に肉の動くのを覺えた。

向島のうら枯さへ見に行く人もないのに、秋の末の十二社、其はよし、もの好として差措いても、小山には未だ令室のないこと、並びに今も來る途中、朋友なる給水工場の重役の宅で一盞すゝめられて杯の遣取をする内に、娶るべき女房の身分に就いて、忠告と意見とが折合ず、血氣の論とたしなめられながらも、耳朵を赤うするまでに、譬ひいかなるものでも、社會の階級の何種に屬する女でも乃公が氣に入つたものをといふ主張をして、華族でも、士族でも、町家の娘でも、令嬢でも譬ひ小間使でもと言つたことを爰に斷つて置かねばならぬ。

何か知ら祥が搦んで居るらしい、判事は、いづれ不祥のことゝ胸を――色も變つたやう、
「何うかしたのかい、」と少しせき込んだが、
いふ言葉に力が入つた。

「煩つて居りますので、」

「何、煩つて、」

「はい、煩つて居りますのでございますが。・

・
・
・
「

「良い醫者にかけなけりや不可んよ。甚麼病氣だ、
此處いらは田舎だから、」とつい通の人の唯口さ
きを合せる一應の挨拶の如きものでは無い。

婆さんも張合のあることゝ思入つた形で、

「折入つて旦那様に聞いてやつて頂きたいので、
委しく申上げませんと解りません、お可煩くなりま
したら、面倒だとおつしやつて下さりまし、直ぐと
お茶にいたして了ひまする。」

彼の娘は阿米といひまして丁度十八になります、

親おやなしで、昨きよ年の春はるまで麹かうちまち町十五丁目邊ちやうめへん、旦那様だんなさま、
榎えのきのお醫者いしやといつて評判ひやうばんの漢方かんぼうの先生せんせい、其それが伯父御おぢご
に當あたります、其その邸やしきで世話せわになつて育そだちましたさう
でございます。

門もんの屋根やねを突貫つきぬいた榎えのきの大木たいぼくが、大層たいそう名高なだかいので
ございますが、お醫者いしやは何いういたしてか些ちつとも流は行や
らないのでございましたツて。」

「流行りません癖に因果と貴方ね、」と口もやゝ馴々しう

「お米の容色がまた評判でございまして、別嬪のお医者、榎の先生と、番町邊、津の守坂下あたりまでも皆が言囃しましたけれども、一向にかゝりま

す病人がございせん。

先生には奥様と男のお兒が二人、姪のお米、外見を張るだけに女中も居ようといふのですもの、お苦しからうではございせんか。

其處で、茨城の方の田舎とやらに病院を建てた人が、尤もらしい御容子を取柄に副院長にといふ話がありましてさうで、早速家中其へ引越すことになり

ますと、お米さんでございます。

世帯を片づけ次手に、古い箆笥の一棹も工面をするから何方へか片附いたらと、體の可いまあ厄介拂に、其の話がありました、彼の娘も全く縁附く氣はございませず、親身といつては他になし、山の奥へでも一所にといひたい處を、其は遣繰の様子も知

つて居りますことなり、未だ嫁入はいたしたくござ
いません、我儘を申しますやうで恐入りますけれど
も、奉公がしたうございますと、まあ恚ういふので。

伯父御の方は何の道足手まとひさへなくなれば可
いのでございますよ、賣れば五兩にもなる箆笥だつ
てお米につけないですむことですから、二ツ返事で
呑込みました。

那の容色で家の仇名にさへなつた娘を、親身を突
放したと思へば薄情でございますが、切ない中を當
節柄、却つてお堅い潔白なことではございませんか
ね、旦那様。

漢方の先生だけに仕込んだ行儀もございます。丁
度いい口があつて住込みましたのが、唯今居ります
る、つい此の先のお邸で、お米は小間使をして、そ
れから手が利きますので、お針もして居りますので
ございますよ。」

「誰の邸だね。」

「はい、澤井さんといつて旦那様は臺灣のお役人
ださうで、始終那地へお詰め遊ばす、お留守は奥様、
お老人はございませんが、餘程の御一 大身だと申す
ことで、奉公人も他に大勢、男衆も居ります。お嬢
様がお一方、お米さんが附きましては一寸々々此の
池の緋鯉や目高に麩を遣りにいらつしやいます、
此處等の者は皆 姫様々と申しますよ。」

奥様のお顔も存じて居ります、私 がついお米と
馴染になりましたので、お邸の前を通りますれば折
節お臺所 口へ寄りましては顔を見て歸りますが、
お米の方でも私 どものやうなものを、何う間違へ
たかお婆さんノと、一體人懐いのに又格別に慕つ
てくれますので、何うやら他人とは思へません。」

婆さんは此時、瀧登の懸物、柱かけの生花、月並
の發句を書きつけた額などを靜に 二したから、判事
も釣込まれて何故とはなくあたりを眺めた。

向直つて顔を見合せ、

「此家は旦那様、停車場前に旅籠屋をいたして居
ります、甥のものでも私 はまあ其の厄介でござい

ます。夏此の灌の繁昌な時分は却つて貴方、邪魔も
ので本宅の方へ参つて居ります、秋からは恙うやつ
て棄てられたも同然、私も姨捨山に居ります氣で
巢守をしますのでございましてね、否、愚痴なこと
を申上げますのではございませんが、お米も其處を
不便だと思つてくれますか、間を見てはちよこ／＼
と驅けて来て、袂からだの、小風呂敷からだの、好
なものを出して養つてくれます深切さ、
「としめやかに語つて、老の目は早や涙。」

密と、筒袖になつて居る襦袢の端で目を拭ひ、

「其でございませうから一日でも顔を見ませんと寂しくつてなりません、然ういふことになつて見ますと、役者だつて鼻肩のには可い役がさして見たいうございませう、立派な服装がさせて見たうございませう。あゝ、叶屋の二階で田之助を呼んだ時、其の男衆にやつた一包の祝儀があつたら、あのいぢらしい娘に褌の揃つたのが着せられませうものなぞと、愚痴も出ます。唯今の姿を罰だと思つて罪滅しに懺悔ばなしもいひます。私も懺う申してはお恥かしうございませうが、昔から忓うばかりでもございません、其もこれも皆なり行だと断念めましても、断念められませんのはお米の身の上。

二三日顔を見せませんから案じられます逢ひたうはございませう、辛抱がし切れませんで一寸澤井様のお勝手へ伺ひますと、何貴方、お米は無事で、奥様も珍しいほど御機嫌のいゝ處、竹屋の婆さんが來たが、米や、此方へお通し、とおつしやると、彼の

娘もいそ／＼、連れられて上りました。頃日客が立て込んだが、今日は誰も来ず、天気は可し、早咲の菊を見ながら丁度お八ツ時分と、お茶お菓子を下さ
いまして、私 風情へ種々と浮世話。

お米も嬉しさうに傍について居てくれますなり、
私 はまるで貴方、嫁にやつた先の姑に里の親が優しくされますやうな氣で、ほく／＼もので居りました。

何、米に豫々聞いて居る、婆さんお前は心懸の良
いものだといふから、滅多に人にも話されない事だ
けれども、見せて上げよう。黄金が肌に着いて居る
と、霧が身のまはり六尺だけは除けるとまでいふの
だよ、とおつしやつてね。

貴方五百圓。

臺灣の旦那から送つて来て、丁度其の朝銀行で請
取つておいでなすつたといふ、ツツシリと重いのが
百圓づゝで都合五枚。

お手箆笥の抽斗から厚紙に包んだのをお出しなす
つて、私 に頂かして下さいました。

両手に据ゑて拜見をいたしましたが、何と申上げやうもございませぬ。唯へい／＼と申上げますと、何うだね、近頃出来たばかり、年號も今年のだよ、然ういふのは昔だつて見た事はあるまい、又見ようたつて見せられないのだから、ゆつくり御覽、正直な年寄だといふから内證で拜ませるのだよ。米や茶をさしてお遣り、と莞爾ついでおいで遊ばす。へ、と婆さんは薄笑をした。

判事は眉を顰めたのである、片腹痛さも斯の如きは澤山あるまい。

婆さんは額の皺を手で擦り、「はや實にお情深い、尤も赤十字とやらのお顔利と申すこと、丸顔で、小造に、肥つておいで遊ばす、血の氣の多い方、髪をいつも西洋風にお結びなすつて、貴方、其時なんぞは銀行からお歸り勿々と見えまして、白襟で小紋のお召を二枚も襲ねて被在しやいました、早口で辯舌の爽な、ちよこまかにあれこれ／＼、始終小刻に體を動かし通し、氣の働のあらつしやるのは格別でございます、旦那様。」

と上目づかひ。

判事は黙つてうなづいた。

婆さんは唾をのんで、

「お米はいつもお情ない方だとばかり申しませんが、
其は貴方、女中達の箸の上げおろしにも、いやあゝ
だの恚うだのおつしやるのも、欲だけ食べて胃
袋を悪くしないやうにといふ御深切でございませう
けれども、私 は胃袋へ入ることよりは、腑に落
ちぬことがあるでございますよ。」

「昨年きよねんのことで、妙めうにまたいとこはとこが搦からみま
すが、これから新宿しんじゆくの汽車きしやで大久保おほくほ、板橋いたばしを越こしま
して、赤羽あかばねへ参まゐります、赤羽あかばねの停車場ステイションから四人にんづめ詰づば
かりの小さい馬車ばしやが往復わうふくします。岩淵いはぶちの渡場わたしば手前てまへ
に、姉あねの悴せがれが、女房にようばうもち持もちで水吞みずのむちやくしやう百姓ひやくしやうをいたして居をり
まして、しがない身上みのうへではありまするけれど、氣立きだて
の可いい深切しんせつものでございますから、私わたくしも當あてには
しないで心頼こゝろたよりりと思おもうて居をります。其それへ久ひさしぶりで
不沙汰ぶさた見舞みまひに参まゐりますと、狭せまい處ところへ一晩ばんと泊とめてくれ
まして、翌日あくるひおひる過ぎ歸かへりがけに、貴方あなた、納屋なやの
わきにございます、柿かきを取とつて、土産みやげを持もつて行ゆき
ました風呂敷ふろしきに其それを包つんで、をばさん、詰つまらねえも
のを重おもくツても、持もつて行いつとくんせえ。其そのか
はり私わたしが志こゝろまじで、此處こゝへわざと端錢はしせんを恚かう勘定かたちやうし
て置おきます、これで何どうぞ腰こしの痛いたくねえ汽車きしやの中ちゆう等とう
へ乗のつて、と割わつて出だしましたゞけに心持こゝろもちが嬉うれしう
ございませう。勿體もつたいないが其それでは乗のらうよ。あゝ、
をばさん御機嫌ごきげんようと、女房にようばうもちも深切しんせつな。

二人とも野良へ出がけ、其ではお見送はしませんからと、跣足のまゝ並んで門へ立つて見て居ります。岩淵から引返して停車場へ來ますと、やがて新宿行のを賣出します、それから此服装で氣恥かしくも無く、切符を買つたのでございますが、一等二等は賣出す口も違ひますね、旦那様。

人ごみの處をおしもおされもせず、これも夫婦の深切と、嬉しいにつけて氣が勇みますので、臆面もなく別の待合へ入りましたが、誰も居りません、彼處は又一倍立派でございますね、西洋の緞子見たやうな綾で張詰めました、腰をかけますとふはりと沈んで、爪尖がボンと恚う、

婆さんは手を揃へて横の方で軽く拂き、
「刎上りますやうなのに控へ込んで、何う又度胸が据りましたものか澄して居ります處へ、ばら／＼と貴方、四五人入つておいでなすつたのが、其の澤井様の奥様の御同勢でございます。

突然卓子の上へシヨオルだの、信玄袋だのがどさ／＼と並びますと、連の若い男の方が鐵砲をどしりとお乘せなすつた。銃口が私の胸の處へ向きま

したものでございますから、飛上つて旦那様、目も
くらみながらお辭儀をいたしますると、奥様のお聲
で、

「おやお婆さん、此處は上等の待合室なんだよ、と
何うでせう恚うでございます。」

人の胃袋の加減や腹工合は何うであらうと、私
が腑に落ちないと申しますのは此處なんでございま
すが、爾時は唯最う冷汗びツしより、穴へでも入り
たい氣になりまして、悄悄片隅の氷のやうな腰掛へ
下りました。

後馳せに束々と小走に入りましたのが、矢張お供
の中だつたと見えまする、那のお米で。

卓子を取巻きまして御一家がづらりと、お米が姫
様と向う正面にあいて居る自分の坐る處へ坐らない
で、おや、あなたあいて居りますよ、もし、此方へ
お懸けなさいましたな、冷えますから、と旦那様。」

「婆さんは又淚含んで、」

「袂から出した手巾を、何と其のまあ結構な椅子
に摺りながら、人込の塵埃もあらうと拂いてくれま

したらうではございませんか、私わたくしが、あの娘こに
知己ちかづきになりましたのは爾時そのときでございました。「
待まて、判事はんじがお米よねを見みたのも又また其それがはじめてゞあ
つた。

婆さんは過日己が茶店に此の紳士の休んだ折、
 不意にお米が來合せたことばかりを知つて居るか知
 らずや爾時、同一赤羽の停車場に、澤井の一行が卓
 子を輪に圍んだのを、遠く離れ、帽子を目深に、外
 套の襟を立て、件の紫の煙を吹きながら、目ばか
 り出した其の清い目で、一場の光景を屹と瞻つて居
 たことを、然れば婆さんは今其事について何にも言
 はなかつたが、實は此の媪、お米に椅子を拂つて招
 じられると、帶の間からぬいと青切符を故とらしく
 拔出して手に持ちながら、勿體ない私風情がと
 いひ／＼貴夫人の一行をじろりとニし、躍り寄つて、
 お米が脊後に立つた前の處、即ち舊の椅子に直つて、
 而して手を合せて小間使を拜んだので、一行が白け
 渡つたのまで見て知つて居る位であるから、此のあ
 ひだの此の茶店に於ける會合は、娘と婆さんとは
 不意に顔の合つたゞけであるけれども、判事に取つ
 ては蓋し不思議のめぐりあひであつた。

恚く停車場にお幾が演じた喜劇を知つて居る判事

には、婆さんの昔の榮華も、俳優を茶屋の二階へ呼びなどしたところのある様子も、此の寂寞の境に堪へ得て一人で秋冬を送るのも、全體を通じて思ひ合さるゝ事ばかりであるが、可し、其も是も判事がお米に對する心の秘密とゝもに胸に秘めて何事も謂はず、たゞ憂慮はしいのは女の身の上、聞きたいのは婆が金貨を頂かせられて、――、

「其から、お前が其の金子を見せて貰ふと、」
促して尋ねると、意外千萬、

「其お金が五百圓、其晩お手筆笥の抽斗から出してお使いならうとすると悉皆紛失をして居たのでございます、」

と句切つて、判事の顔を見て婆さんは溜息を吐いたが、小山も驚いたのである。

赤羽停車場の婆さんの舉動と金貨を頂かせた奥方の所爲とは不言不語の内に線を引いて其がお米の身に結ばれるといふやうな事でもあるだらうと、聞きながら推したに、五百圓が失せたといふのは思ひがけない極であつた。

「え、悉皆紛失？」と判事も屹と目を瞠つたが、此の人々は其の意氣に於て、五といふ數が、百となつて、圓とあるのに慌てるやうな風ではない。

「まあ何うしたといふのでございますか、抽斗にお了ひなすつたのは私も其時見て居りましたのに、こりや聞いてさへ吃驚いたしますものお邸では大騒ぎ。女などは髮切の化物が飛び込んだやうに上を下、くる／＼舞ふやらぶつかるやら、お米なども蒼くなつて飛んで參つて、私に其の話をして行きましたつけ。

さあ二日経つても三日経つても解りますまい、貴夫人とも謂はれるものが、内からも外からも自分の家のことに就いて罪人は出たく無いとおつしやつて、表沙汰にはなりません、兎に角、不取締でございませうから、旦那に申譯がないとのことで大層御心配、お見舞に伺ひまする出入のものに纏ばかりだけれども纏ばかりだけれどもと念をお入れなすつちやあ、其の御吹聴で。

然ういたしますとね、日頃お出入の大八百屋の亭

主^{しゅ}で佐助^{さすけ}と申^{まを}しまして、平生^{へいぜい}は奉公^{ほうこう}人大勢^{にんおほせい}に荷^にを擔^{かつ}
がせて廻^{まは}らせて、自分^{じぶん}は帳場^{ちやうば}に坐^{すわ}つて居^ゐて四^よツ谷^や切^き
つて手^て廣^{びる}く行^やつて居^をりまするのが、わざ／＼お邸^{やしき}へ
出^でて參^{まゐ}りまして、奥^{おく}様^{さま}に勸^{すす}めました。さあ之^{これ}が旦那^{だんな}
様^{さま}、目^め黒^{くろ}、堀^{ほり}ノ内^{うち}、澁^{しぶ}谷^や、大^{おほ}久^く保^ぼ、此^この目^め黒^{くろ}邊^{あたり}をか
けて徘徊^{はいくわい}をいたします、眞^ま夜^よ中^{なか}には誰^{だれ}とも知^しらず空^{そら}
のものと談^{はなし}話を^{はなし}しますといふ、鼻^{はな}の大^{おほ}きな、爺^{ぢい}の化^{ばけ}
精^{もの}でございまして。」

「旦那様、此邊をお通り遊ばしたことがございませぬなら、田舎道などでお見懸けなさりはしませんか。もし、御覽じましたら、唯鼻と恚う申せば、お分りになりますでございませう。」

判事は一寸口を挟んで、

「鼻、何鼻の大きい老人、」

「御覽じやりましたかね。」

「む、過日來る時奇代な人間が居ると思つたが、其か。」

「其でございませとも。」

「お待ち、丁ど彼處だ、」と判事は胸を斜めに振返つて、欄干に肱を懸けると、瀧の下道が三ツばかり畝つて葉の蔭に入る一叢の藪を指した。

「彼の藪を出て、少し行つた路傍の日當の可い處に植木屋の木戸とも思ふのがある。」

「はい、植吉でございませ。」

「然うか、其木戸の前に、何處か四ツ谷邊の縁日へでも持出すと見えて、女郎花だの、桔梗、龍膽だの、何、大したものはない、ほんの草物ばかり、其はノ、綺麗に咲いたのを積んだまゝ置いてあつた。私は恚う下を向いて來懸つたが、目の前をちよろ／＼と小蛇が一條、彼岸過だつたに、ぽか／＼か暖かつた所爲か、植木屋の生垣の下から道を横に切つて畠の草の中へ入つた。大嫌だから身震をして立留つたが、又歩行き出さうとして見ると、蛇よりもつとお前心持の悪いものが居たらうではないか。

其が爺よ。

綿を厚く入れた薄汚れた棒縞の廣袖を着て、日に向けて脊を圓くして居たが、なりの低い事。草色の股引を穿いて藁草履で立つて居る、顔が荷車の上あたり、顔といへば顔だが、成程鼻といへば鼻が。」

「でございませうね、旦那様。」

「高いんぢやあないな、彼は希代だ。一體馬面で顔も胸位あらう、白い髭が針を刻んでなすりつけたやうに生えて居る、頤といつたら臍の下に届いて、その頤の處まで垂下つて、口へ押冠さつた鼻の尖は

ぜんまいのやうに巻まいて居ゐるぢやあないか。薄うす紅あかく色いろがついて其その癖くせ筋すぢが通とほつちやあ居ゐないな。目めはしよぼ／＼して眉まゆが薄うすい、腰こしが曲まがつて大儀たいぎさうに、船せん頭とうが持もつ權かいのやうな握にぎ太りな、短みじい杖つゑをな、唇くちびるへあてゝ手てを其その上うへへ重かさねて、彼あれぢやあ持もち重おもりがするだらう、鼻はなを乗のせて、氣けだるさうな、退たい屈くつらしい、呼い吸きづかひも切せつなさうで、病やみ後あがり見みたやうな、凡およそ何なんだ、身から體た中ちゆうの精せい分ぶんが不の殘ら集あつつて熟じゆくしたやうな鼻はなツつきだ。而そして脊せを屈かめて立たつた處ところは、鴻こうの鳥とりが寢ねて居ゐるとしか思おもはれぬ。」

「えゝ、もう傘かのお化ばけがとんぼを切きつた形かたちなんでございますよ。」

「芬ぶんと穢え多た村むらへ入はいつたやうな臭におひがする、其その爺ぢい、餘あまり日ひ南なたぼツこを仕し過すぎて逆さか上のせたと思おもはれる大おほきな眞しん鍬ちゆうの耳みみ搔かき持もつて、片かた手てで鼻はなに杖つゑをついたなり、馬面うまつらを据すゑて置おいて、耳みみの穴あなを搔かきはじめた。」

「彼あれは癖くせでございまして、どんな時ときでも耳みみ搔かきを放はなしましたことはないのぞございます。」

「餘あまり希き代たいだから、はてな、之これは植うゑ木き屋やの荷にぢや

あなくツて、何處へか小屋がけをする飾につかふ鉢
物で、此の爺は見世物の種か知んといやな香を手
でおさへて見て居ると、爺がな、クツクツクツとい
ひ出した。

恐しい鼻呼吸ぢやあないか、荷車に積んだ植木鉢
の中に突込むやうにして桔梗を嗅ぐのよ。

風流氣はないが秋草が可哀さいうで見居られな
い。私は見返もしないで、さつさと此方へ通抜けて
来たんだが、何だ彼は。　　といひながらも判事は
眉根を寄せたのである。

「お聞きなさいまし旦那様、其の爺のためにお米
が飛んだことになりました。」

九

「先づ彼は易者なんで、佐助めが奥様に勧めましたのでございます、鼻はトをいたします。」

「トを。」

「唯、トをいたしますが、旦那様、あの笹竹を讀んで算木を並べます、那いふのではございません。二三度何とかいふ新聞にも大騒ぎを遣つて書きました。耶蘇の方でむづかしい、豫言者とか何とか申しますとのこと、矢張活如来様が千年のあとまでお見通しで、彼はあゝ、是は恚うと御存じでいらつしやると云つたやうなものでございます。」

眞顔で言ふのを聞きながら、判事は二ツばかり握拳を横にして火鉢の縁を軽く壓へて、確めるが如く、
「那の鼻が、活如来？」

「否、其の新聞には豫言者、何云ふことか私には解りませんが、然う申して出しましたさうで。何しろ貴方、先の二十七年八年の日清戦争の時なんざ、はじめからしまひまで、昨日は何處其處の城が取れた、今日は可恐しい軍艦を沈めた、明日は雪の

中で大戦がある、尤も此方がたが勝ぢや喜びなさい、いや、あと二三ヶ月で鎮るが、臆て臺灣が日本のものになるなど、一々申す事が皆中りまして、號外より前に整然と心得て居るくらゐは愚な事。あゝ今頃は清軍の地雷火を犬が嗅ぎつけて前足で掘出して居るわの、あれ、見さい、軍艦の帆柱へ鷹が留つた、めでたいと、何と其の戦に支那へ行つておいでなさるお方々の、親子でも奥様でも夢にも解らぬことを手に取るやうに知つて居たといふ吹聴ではございませんか。

其も道理、其の老人は、年紀十八九の時分から一時、此の世の中から行方が知れなくなつて、今までの間、甲州の山續き白雲といふ峰に閉籠つて、人足の絶えた處で、行ひ澄して、影も形もないものと自由自在に談が出来るやうになつた、實に希代な豫言者だと、其の山の形容などいふものはまるで大薩摩のやうに書きました。

其の鼻が那の爺なんでございましてね。

唯、否、然やうでございませぬ、旦那様も新聞で御

存じでも、あの爺のことゝは思召しますまいよ、些とも鼻の大きなことは書いてないのださうでございますから。

尤も鍾馗様がお笑ひ遊ばしちやあ、鬼が恐がりはいたしますまい、私どもが申せば活如来、新聞屋さんがおつしやれば其の豫言者、活如来様や豫言者殿の、其の鼻ツつきが那だとあつては、根ツから難有味がございませぬもの、賣ものに咲いた花でございませう。

其癖雲霧が立籠めて、晝も眞暗だといひました、甲州街道の其の峰と申しますが、今でも爺さんが時々お籠をするといふ庵がございますつて其處は貴方、府中の鎮守様の裏手でございまして、手が届きさうな小さな丘なんでございますよ。尤も何千年の昔から人足の絶えた處には違ひございませぬ、何處でも生えてりや小兒が取りに入りませうけれども、御覽じやりまし、お茶の水の向うの崖だつて仙臺様お堀割の昔から誰も足踏をした者はございませぬや。日陰は何處だつて朝から暗うございまする、何うせあんな萌の絲爪のやうな大きな鼻の生えます處でこ

ざいますもの、うつかり入らうものなら、蚯蚓みづずの天てんじ
上やうするのに出でツくはして、目めをまはしませんければ
なりますまいではございませつか。「と、何かなに激げき
したことがあるらしく婆ばあさんはまくしゝかけた。

一息つき言葉をつぎ、

「第一、其の日清戦争のことを見透して、何か自分
が山の祠の扉を開けて、神様のお馬の轡を取つて、
跣足で宙を駈出して、旅順口にわたりやお手傳
でもして来たやうに申しますが、些とも戦のあつた
最中に、そんなことが解つたのではございません。
漸々一昨年从去年あたりへかけて騒ぎ出したので
ございますものゝ疑つて見ました日には、當になり
はいたしません。しかしまあ何でございませぬ、前
觸が皆勝つことばかりで其が事實なんですから結構
で、私なども其の話を聞きました當座は、もう
／＼貴方。」

と黙つて聞いて居た判事に強請るが如く、

「お可煩くは被在やいませんか、」

「悉しく聞かうよ。」

判事は倦める色もあらず、お幾はいそ／＼して、

「えゝ何うぞ。條を申しませんと解りませぬ。」

私どもは以前、唯戦争のことにつきまして彼が御

祈禱きたうをしたり、お籠こもり 斷食だんじきなどをしたといふ事ことを聞ききました時は、難有ありがたい人ひとだと思おもひまして、あんな鼻はな附つきでも何なんとなく尊たふといものゝやうに存ぞんじましたけれども、今度こんどのお米よねのことで、すつかり敵對むかうになりましたして、憎にくらしくツて、癩しやくに障さはつてならないのでござい
ます。

あんなものゝいふことが當あてになんぞなりますものか。ト もくだらないもあつたもんぢやあござい
ません。

でございますが、難有ありがた味みはなくツてゞも信仰しんかうはし
ませんでも、厭いやな奴やつは厭いやな奴やつで、私わたくしが恚かう惡口あくこう
を申まをしますのを、形かたちは見みえませんが何處どこかで聞き
て居ゐて、仇あだをしゃしまいかと思おもひますほど、氣味きみの
惡わるい爺ぢいなんでございまして、

といひながら日暮ひくれ際ぎはのぱつと明あかるい、艶つやのないぼや
けた下したなる納戸なんどに、自分じぶんが座ざの、人ひとなき薄汚うすよこれた座ざ
蒲團ぶとんのあたりを見て、婆ばあさんは後見うしろみらるゝ風情ふぜいであ
つたが、聲こゑを低ひくうし、

「全體ぜんたい那あの爺ぢいは甲州街道かふしうかいだうで、小商人こあきんど、煮賣屋にうりやとも

つかず、茶屋ともつかず、駄菓子だの、柿だの饅頭だのを商ひまする内の隠居でございまして、私ども子供の内から親どもの話に聞いて居りましたが、何でも十六七の小僧の時分、神隠しか、攫はれたか、何方知れずになつたんですつて。見えなくなつた日を命日にして居る位でございましたさうですが、七年ばかり経ちましてから、ふいと内の者に姿を見せたと申しますよ。

其もね、旦那様、まともに歸つて来たものではありません。破風を開けて顔ばかり出しましたとき、厭ぢやありませんか、正丑の刻だつたと申します、と婆さんは肩をすぼめ、

「然も降續きました五月雨のことで、攫はれて参りましたと同一夜だと申しますが、皴枯れた聲をして、

(家中無事か、) といったさうでございますよ。見ると、眞暗な破風の間から、ばやけた鼻が覗いて居ませうではございませんか。

皆、手も足も縮んでしまひましたらう、縛りつけられたやうになりましたさうでございですが、未だ其の親が居りました時分、魔道へ入つた兒でも鼻を嘗めたいほど可愛かつたと申します。

（悴、まあ、）と父親が寄らうとしますと、變な聲を出して、

「寄らつしやるな、暫く人間とは交らぬ、と拂ひ退けるやうにして其から一式の恩返しだといつて、爾時、饅頭の餡の製し方を教へて、屋根から又行方が解らなくなつたと申しますが、其からは其の島屋の饅頭といつて街道名代の名物でございませう。」

「在り來りの皮は、龐末な麥の香のする田舎饅頭
 なんです、其の餡の工合が又格別、何とも申され
 ません旨さ加減、其に幾日置きましても干からびず、
 味は變りませんのが評判で、賣れますこと／＼。

近在は申すまでもなく、府中八王子邊までもお土
 産折詰になりますわ。三鷹村深大寺、櫻井、駒返し、
 結構お茶うけはこれに限ると東京のお客様にも自慢
 をするやうになりましたでせう。

三年と五年の中にはめき／＼と身上を仕出しまし
 て、家は建て増します、座敷は拵へます、通庭の
 兩方には入込でお客が一杯といふ勢、到頭藏の
 二戸前も拵へて、初はほんの最上屋臺店で澁茶を汲
 出して居りましたのが俄分限。

七年目に一度顔を見せましてから毎年五月雨の其
 晩には、屹度一度づゝ破風から覗きまして、

（家中無事か。）おほ、厭だ！と寂しげに
 笑つてお幾婆さんは身顔をした。

「其中親が亡なつて代がかかりました。三人の兄弟で、仁右衛門と申します那の鼻は、一番の惣領、二番目があとを取ります筈の處、之は厭ぢやと家出をして坊さんになりました。」

其處で三藏と申します、末が家へ坐りましたが、街道一の家繁昌、何ういたして早や唯の三藏ぢやあございませぬ、寄合にも上席で、三藏旦那でございませぬ。

誰のお庇だ、これも兄者人の御守護の所爲何ぞ恩返しを、と神様あつかひ、伏拜みましてね、

と婆さんは掌を合せて見せ、

「一年、矢張其の五月雨の晩に破風から鼻を出した處で、（何ぞお望のものを）と申上げますと、（唯据ゑて置けば可い、女房を一人、）と然ういつたさうでございませぬ。」

「ふむ、」

「まあ、お聞き遊ばせ、恚うなんでございませぬよ。其から何事を差置いても探しますと、ございませぬ。来るものも一生奉公の氣なら、島屋でも飼殺しのつもり、其が年寄でも不具でもございませぬ。」

「色の白い、美しいのがいゝゝ。」

と異なる聲で、破風口から食好を遊ばすので、十八になるのを伴って参りました、一番目の嫁様は来た晩から呻いて、泣煩うて貴方、三月目には瘦衰へて死んで了ひました。

其次のも時々悲鳴を上げましたさうですが、二年経つて矢張骨と皮になつて、可哀さうに之もいけません。

さあ来るものも、一年たつか二年持つか、五年とこたへたものは居りませんで、九人までなくなつたのでございます。

あるに任して金子も出したではございませうが、よくまあ、世間は廣くツて八人の九人のと目鼻のある、手足のある、胴のある、髪黒い、色の白い女があつたものだと思ひますのでございますよ。十人目に十三年生きて居たといふ評判の婦人が一人、其は私も那の邊に参りました時、饅頭を買ひに寄りまして一寸見ましたつけ。

大柄な婦人で、鼻筋の通つた、佳い容色、少し凄

いやうな風ふうツつき、亂みだれがみ髪かみに淺葱あさぎの顱はちまき卷まきをめまして病びやう
人と見みえましたが、奥おくの爐ろのふちに立たて膝ひざをしてだら
しく恁かう、額ひたひに長煙管ながぎせるをついて、骨ほねが抜ぬけたやう
に、がつくり俯向うつむいて居をりましたが。

「百姓家の納戸の薄暗い中に、毛筋の亂れま
した頸脚なんざ、雪のやうで、其が那の、客だと見
て眞蒼な顔で此方を向きましたのを、今でも私は忘
れません。可哀さうに其から二年目に到頭亡なりま
したが、之は府中に居た女郎上りを買つて來て置い
たのだと申します。」

最う其の以前から評判が立つて居りましたので、
山と積まれてからが金子で生命までは賣りませんや、
誰も島屋の隠居には片づき人がなかつたので、何う
いふものでございますか、其の癖、然うやつて、嫁
が極りまして女房が居まして、家へ顔を出しま
すのは矢張張風から毎年其の月の其の日の夜中、丁
度入梅の眞中だと申します、入梅から勘定して隠居
が來たあとを丁度同一やうに指を折ると、大抵梅雨
あけだと噂があつたのでございまして。

實際、おかみさんが出来るやうになりましたから
も參るのは確に年に一度でございましたが、其とも

日に三度づゝも來ましたか、其處どこはたしかなことは解りません。

何にいたしましても、來るものも娶るものも亡くなりましたのは、こりや葬式が出ましたから事實な

らで。
さあ、どんづまりの其の女郎が殺されたから
は、怪我にもゆき人がございません、これは又無い
はずでございませう。

然うすると一年、二年、三年と、段々店が寂れま
して、家も藏も舊のやうではなくなりました。一時
は買込んだ田地なども賣物に出たとかいふ評判でこ
ざいました。

然う恚ういたします内に、然やう、一〇昨年でござ
いましたよ、島屋の隠居が家へ歸つたといふこと
を聞きましたのは。それから戦争の祈禱の評判、一
しきりは女房一件で、饅頭の餡でさへ胸を悪くした
ものも、其のお國のために断食をした、お籠をした、
千里のさき三年のあとのあとまで見通したと、人氣
といつちやあをかしく聞えますが、又隠居殿の曲つ
た鼻が素直になりました、新聞にまで出まする騒ぎ。

豫言者だ、と旦那様、活如來の扱でございませう。

あゝ、やれ／＼、家へ歸つてもあの年紀で毎晩々々、機織の透見をしたり、絲取場を覗いたり、のそり／＼這ふやうにして歩行いちや、五宿の宿場女郎の張店を兩側ね、絲をかゞりますやうに一軒々々格子戸の中へ鼻を突込んだやあクン／＼嗅いで歩行くのを御存じないか、と内々私 は些と聞いたことがございませうので、然う思つて居りましたが、善くは思ひませんばかりでも、お肚のことを嗅ぎつけられて、變な杖でのろはれたら、どんな目に逢はうも知れぬと、薄気味の悪い爺なんでしょう。

「其が貴方、以前からお米を貴方。」

「と少し言漉りながら、」

「跟けつ廻しつして居るのでございます。」と
思切つた風でいつたのである。

「何、お米を、彼が、」

と判事は口早にいつて、膝を立てた。

「否、あの、これと定つたこともございませぬ、
ございませぬやうなものゝ、ふら／＼堀の内様の近

邊、五宿あたり、夜更でも行きあたりばつたりにう
ろついで、この邊へはめつたに寄りつきませなんだ
のが、澤井様へお米が参りまして、此處でも又、容
色が評判になりました時分から、藪からでも垣から
でも、ひよいと出ちやあ那の女の行くさを跟ける
のでございます。薄ぼんやり何處にか那の爺が立つ
てるのを見つけましたものが、もし其の歩き出しま
すのを待つて居りますれば、屹度お米の姿が道に見
えると申したやうなわけでございます。

「

「おなじ奉公人どもが、唯さへ口の悪い處へ、大事出来のやうに言ひ囃して、からかひ半分、お米さんは神様のお氣に入つた、いまに緋の袴をお穿きだよ、なんてね。

まさかに氣があらうなどゝは、怪我にも思ふのぢやございますまいが、串戯をいはれるばかりでも、癩病の呼吸を吹懸けられますやうに、彼の女も弱り切つて居りましたさうですが。

つい事の起ります少し前でございました、澤井様の裏庭に夕顔の花が咲いた時分だと申しますから、未だ浴衣を着てをりますほどのこと。

急ぎの仕立物がございましたかして、お米が裏庭に向きました部屋で針仕事をして居たのでございませぬ。

未だ明を點けません、晩方、直き其の夕顔の咲いて居ります垣根のわきがあらう格子。手許が暗くなりましたので、袖が觸りますばかりに、格子の處へ寄つて、縫物をして居りますと、外は見通しの畠、畦道を馬も百姓も、往つたり、來たりします處、何

處で見當をつけましたものか、彼の爺のそ／＼嗅ぎつけて参りましてね、蚊遣の煙が何處となく立ち渡ります中を、段々近くへ寄つて来て、格子へつかまつて例の通り、鼻の下へつゝかひ棒の杖をついて休みながら、ぬつと彼のふやけた色づいて薄赤い、てら／＼する鼻の尖を突き出して、お米の横顔の處を嗅ぎ出したのでございますと。

もう／＼五宿の女郎の、油、白粉、襟垢の香まで嗅いで／＼嗅ぎためて、ものゝ匂で重量がついて居るのでございませぬもの、夢中だつて氣勢が知れます。其が貴方、明前へ、突立つてるのぢやあございませぬ、脊伸をしてからが大概人の蹲みます位なんで、高慢な、澄した今産れて来て、娑婆の風に吹かれたといふ顔色で、黙つて、暖をしちやあ、クン／＼、クン／＼小さな法螺の貝ほどには鳴したのでございます。

麴室の中へ縛られたやうな何ともいはれぬ厭な氣持で、頃刻は我慢をもしましたさうな。

お米が氣の弱い臆病ものゝ癖に、一寸癩持で、氣に障ると直きつむりが疼み出すといふ風なんですか

ら堪りませんや。

其でも彼の爺の、むかしノを存じて居りますれば、劫経た私どもでさへ、向面へ廻しちやあ氣味の悪い、人間には籍のないやうな爺、目を塞いで逃げますまでも、強いことなんぞ謂はれたものではございせんが、其處は彼の女は近頃此方へ参りましたなり、破風口から、 〓無事か〓 の一件なんざ、夢にも知りませず、又た澤井様などでも誰もそんなことは存じません。

串戯にも、つけまはして居る様子を、そんな事でも聞かせましたら、夜が寝られぬほど心持を悪くするだらうと思ひますから、私 もうつかりしやべりませんでございますから、彼の女は唯汚い變な乞食、親仁、あてにならぬト者を、愚痴無智の者が獸を拜む位な信心をして居るとばかり承知をいたして居りましたので、

(不可ませんよ、不可ませんよ、) といつても、ぬツとしてクンノ。

(お前は、うるさいね、) と手にして居た針の

尖、指環に耳を突立てながら、一寸鼻頭を突いたさ

うでございませ、唯。

「
といつて婆さんは更まつた。

十四

「洋犬の妾になるだらうと謂はれるほど、其の緋の袴でなぶられるのを汚はしがつて居た、處女氣で、思切つたことをしたもので、其で胸がすつきりしたと何時か私に話しましたつけ。

氣味を悪がらせまいとは申しませんでした、あゝ此の女は飛んだことをおしだ、外のものとは違つて彼のけたい親仁。

蝮の首を焼火箸で突いたほどの祟はあるだらう、と腹ぢやあ慄然いたしましたして、爺は何うしたと聞きましたら、

「否、矢張むず／＼して何處かへ行つて了ひました、其ツ切、さつぱり見かけないんですよ。」と手柄顔に、お米は胸がすいたやうに申しましたが。

なるほど、其後はしばらく此の邊へは立廻りません様子。暫時影を見ませんから、それぢやあそれなりに成つたか不知。帳消しにはなるまいと思ひながら、一日ましに私も些とは気がゝりも薄らぎました。然ういたしますと今度の事、飛んでもない、旦那

様、五百圓紛失の一件で、前申しました澤井様へ出入の大八百屋が、あるじ自分で罷出ましてさ、お金子の行方を、一番、是非、だまされたと思つて仁右衛門にみてお貰ひなさいまし、と斷つて、勧めたのでございますよ。

何うして、禮なんぞ遣つては腹を立てて祟をします、唯人助けに仕りますることで、好でお籠をして影も形もない者から聞いて來るのでございます、と悪氣のない男ですが、とかく世話好の、何でも四文とのみ込んで差出たがる親仁なんで、まめだつて申上げたものですから、仕事はなし、新聞は五種も見て在らつしやる澤井の奥様。

内々其の豫言者だとかいふことを御存じなり、外に當はつかず、旁々其では、と早速爺をお頼み遊ばすことになりました。

府中の白雲山の庵室へ、佐助がお使者に立つたやら。一日措いて澤井様へ参りましたさうでございます。而してこれはお米から聞いた話ではございません、爺をお招きになりましたことなんぞ、私はい些とも存じないで居りますと、丁ど其のトを立

てた日の晩方でございます。

旦那様、貴下が桔梗の花を嗅いでる處を御覽じや
りましたといふ、吉さんといふ植木屋の女房でござ
います。小體な暮しで共稼ぎ、使行やら草取や
らに雇はれて參るのが、稼の歸と見えまして、手甲
脚絆で、貴方、鎌を提げましたなり、ちよこ／＼と
寄りまして、

（お婆さん今日は不思議なことがありました。澤
井様の草刈に頼まれて朝疾くから彼方へ上つて働い
て居りますと、五百圓のありかをトふのだといつて、
仁右衛門爺さんが、八時頃に遣つて来て、お金子が
紛失したといふお居室へ入つて、其から御祈祷がは
じまると謂ふこと、手を休めてお庭から其の一室の
方を見て居りました。何をしたか分かりません、障子
襖は閉切つてございましたつけ、ものゝ小半時経つ
たと思ふと、見て居た私は吃驚して、地震だ／＼、
と極の悪い大聲を立てましたわ、何の事はない、お
居間の瓦屋根が、波を打つて揺れましたもの、其が
又目まぐるしく大揺れに揺れて、其まゝひっそり靜
まりましたから、縁側の處へ駈けつけて、丁ど出て

参まゐりましたお勢せいさんといふ女中ぢよぢゆうに、酷ひどい地震ぢしんでござ
いましたね、と謂いひますとね、けぐんな顔かほをして、
へい、と謂いつたツ切きり、氣けもないことなんで、奇代きだいで
奇代きだいで、と恚かう申まをすんでございませう。」

「いかにも私だつて地震があつたとは思ひません、
其の朝は、」

と婆さんは振返つて、やゝ日脚の遠退いた座を立つて、程過ぎて秋の暮方の冷たさうな座蒲團を見遣りながら、

「ねえ、旦那様、彼處に坐つて居りましたが、風立ちもいたしませず、障子に音もございませぬ、穩かな日なんですもの。」

「變ぢやあ無いか、女房さん、それは又た何うした譯だらう、」

（其が御祈禱をした仁右衛門爺さんの奇特でございます。澤井様でも誰も地震などと思つた方はないのでして、唯草を刈つて居りました私の目にはかりお居間の揺れるのが見えたのでございます。大方神様がお寄んなすつた験なのでございませうよ。案の定、お前さん、丁ど祈禱の最中、思ひ合して見ますれば、瓦が揺れたのを見ましたのおなじ時、次のお座敷で、其のお勢といふのに手傳つて、床の間の

柱に、友染の襷かけで艶雑巾をかけて居たお米といふ小間使が、ふつと掛花活の下で手を留めて、活けてありました秋草をじつと見ながら、顔を紅のやうにしたといふことですよ。何か打合せがあつて、密と目をつけて居たものでもあると見えます。お米は其のまんま、手が震へて、足がふらついて、わな／＼して、急に熱でも出たやうに、部屋へ下つて臥りましたさうな。お晝過からは早や、お邸中寄ると觸ると、ひそ／＼話。

高い聲では謂はれぬことだが、お金子の行先はちやんと分つた。しかし手證を見ぬことだから、膝下へ呼び出して、長煙管で打擲いて、吐させる數ではなし、もと／＼念晴しだけのこと、繩着は邸内から出すまいといふ奥様の思召し、又た爺さんの方でも、神業で、當人が分つてからが、表沙汰にはして貰ひたくない、約束をしてかゝつた祈なんださうだから僥倖さ。しかし太い了筒だ、あの細い胸中を、鎖で繋がれる様が見たいと、女中達がいって居りました。眞個に女形が鬢をつけて出たやうな顔色をして居ながら、お米と謂ふのは大變なものぢやあござ

「いませんか、悪黨でもずつと四天で出る方だね、私どもは聞いてさへ五百圓！ と其の植木屋の女房が饒舌りました／＼。」

「旦那様もし貴方、何とお聞き遊ばして下さいますえ。」

「判事は右手のさきで、左の腕を洋服の袖の上から緊乎とおさへて、屹とお幾の顔を見た。」

「何う思召して下さいます、私は口が利けません、いひわけをするのさへ残念で堪りませんから碌に返事もしないで居りますと、灯をつけるにつて、植吉の女房はあたふた歸つてしまひました。何も悪氣のある人ではなし、私とお米との仲を知つてるわけもないのでございますから、驚かして慰むにも當りません、お米は何にも知らないにしましても、いつたゞけのことは其日ありましたに違ひないのでございますもの。」

「私は寝られはいたしません。」

「歸命頂來！ お米が盗んだとしますれば、私」

「は其の五百圓が紛失したといひまする日に、耳を揃

へて頂いたゞかされたのでございます。

どんな顔かほをされまいものでもない、口くち惜やしさは口くち
惜やしし、憎にくらしさは憎にくらし、もうノ、掴つかみついて引ひき巻むし
つて遣やりたいやうな澤さは井ゐの家の人いへの顔かほを見みて、お米よね
に逢あひたいと申まをして出でました。」

「其も、行かうか行くまいかと、氣を揉んで揉抜いた揚句、何うも堪らなくなりまして思切つて伺ひましたので。」

心からでございませう、誰の挨拶もけんもほろゝに聞えましたけれども、其は最うお米に疑がかゝつたなんぞとは、曖にも出しませんで、逢つて歸れ！と部屋へ通されましてでございます。

其でも生命はあつたかと世を隔てたものにも逢ひますやうな心持、突然絶り寄つて、寢て居る夜具の袖へ手をかけますと、密と目をあいて私の顔を見ましたつけ、三日四日が間にめつきりやつれて了ひました、顔を見ますと二人とも聲よりは前へ涙なんでございます。

物もいはないで、彼の女が前髪のはれた額際まで、天鷲絨の襟を引かぶつた切、ふるへて泣いてるのでございませう。

漸々口を利かせますまでには、大概骨が折れた事

ぢやアありません。

口説いたり、すかしたり、怨んで見たり、叱つたり、種々にいたして譯を聞きますると、申譯をするまでもない、お金子に手もつけはしません、駿のある祈をされて、居ても立つても居られなくなつたことがある。

其は！？

矢張お金子の事で、私は飛んだ心得違ひをいたしました、最う何うしませう。固よりお金子は數さへ存じません位ですが、心では誠に濟まないことをしましたので、神様、佛様には何んな御罰を蒙るか知れません。

憎らしい鼻の爺は、其はノ、空恐ろしいほど、私の心の内を見抜いて居て、日に幾度となく枕許へ参つては、

(女、罪のないことは私がよう知つて居る、ぢやが、心に濟まぬ事があらう、私を頼め、助けて遣る、)

とつけつまはしつ謂ふのださいうで。

お米は舌を食ひ切つても爺の膝を抱くのは、厭と冠をふり廻すと申すこと。其は私も同一だけれども、罪のないものが何を恐がつて、煩ふといふことがあるものか。濟まないといふのは一體どんな事とすかしても、口説いても、其は問はないで下さいましと、強ひていへば震へます、頼むやうにすりや泣きますね、調子もかはつて目の色も穏でないやうでございましたが、仕方がございません。で、悄悄其の日は歸りまして、一杯になる胸を搔破りたいほど、私が案ずるより彼の女の容體は一倍で、とう／＼貴方、前後が分らず、厭なことを口走りまして、時々、それ巡查さんが捕まへる、きやつといつて匆起きたり、目を見据ゑましては、うつとりして居て、あゝ、眞暗だこと、牢へ入れられたと申しちやあ泣くやうになりました。そんな容子で、一日々々、此頃では目もあてられませんかやうに弱りました、碌々湯水も通しません。

何か、いろんな恐しいものが寄つて集つて苛みますやうな鹽梅、爺にさへ絶つて頼めば、又お日様が拜まれようと、自分の口からも氣の確な時は申しな

から、其は殺されても厭だといひまする。

神でも佛でも、尊い手をお延ばし下すつて、早く引上げて遣つて頂かねば、見る中にも砂一粒つゝ地の下へ崩れてお米は貴方、旦那様。

奈落の底までも落ちて参りますやいうな様子なのでございます。其上意地悪く、鼻めが澤井様へ入り込みますこと、毎日のやう。奥様は其の祈の時からすつかり御信心をなすつたさうで、疊の上へも一件の杖をおつかせなさいますお扱ひ、其でお米の枕許をこと／＼と叩いちやあ、

（氣分は何うぢや、） といひますさうな。 「

お幾は年紀の功だけに、身を震はさないばかりであつたが、

「いえ、もう下らないこと、くど／＼申上げまして、能くお聞き遊ばして下さいました。昔ものゝ口不調法、随分御退屈をなすつたでございませう。他に相談相手といつてはなし、交番へ届けまして助けて頂きますわけのものではなし、又た親類のものでも知己でも、私が話を聞いてくれさうなものには謂ひました處で思遣にも何にもなるものぢやあございません、旦那様が聞いて下さいましたので、私はい半分だけ、荷を下しましたやうに存じます。其の御深切だけで、もう澤山なのでございますが、欲には旦那様何とか御判断下さいませわけには参りませんか。

こんな事を申しましてお聞上げ・・・處か、もしお氣に障りましては恐入りますけれども、一度旦那様をお見上げ申しましてからの、お米の心は私がよく存じて居ります。謔言にも今度の其の何か澄

まないことやらも、旦那様に對してお恥しいことのやうでもございますが、はしたな 伺い事を。

飛んだことをいふ奴だと思し召しますなら、私だけをお叱り下さいまして、何にも知りませんお米をおさげすみ下さいませえ。

それにつけ彼につけましても時ならぬ此邊へ、旦那様のお立寄遊ばしたのを、私はお引合せと思ひますが、飛んだ因縁だとおあきらめ下さいまして、何うぞ一番一言でも何とか力になりますやう、おつしやつては下さいませんか。何しろ煩つて居りますので、片時でもほつといふ呼吸をつかせて遣りたく存じますが、恚うでございます、旦那様お見かけ申して拜みまする。」と言も切に聲も迫つて、兩眼に浮べた涙と、もに眞は面にあふれたのである。

行懸り、言の端、察するに頼母しき紳士と思ひ、且つ小山を婆が目から其の風采を推して、名のある醫士であると爲たらしい。

正に大審院に、高き天を頂いて、国家の法を裁すべき判事は、能く堪へてお幾の物語の、一一部始終を聞き果てたが、渠は實際、事の本末を、冷かに判

ずるよりも、お米が身に關する故を以て、寧ろ情に於て激せざるを得なかつたから、言下に打出して事理を決する答をば、輿へ得ないで、

「都を少しでも放れると、怪しからん話があるな、婆さん。」

とばかり吐息とゞもにいつたのであるが、言外おのづから其の明眸の届くべき大審院の椅子の周圍、西北三里以内に、恚る不平を差置くに忍びざる意氣があつて露れた。

「何うぞまあ、何は措きまして兎も角もう一服遊ばして下さいまし、お茶も冷えてしまひました。

決して彼の、唯今のことにつきましておねだり申しますのではございません、之からは茶店を預ります商賣冥利、精一杯の御馳走きざ、柿でも剥いて差上げませう。生の栗がございますが、お米が達者で居て今日も遊びに参りましたら、灰に埋んで、彼の器用な手で綺麗にこしらへさして上げませうものを。……何うぞ、唯今お熱いお湯を。旦那様お寒くなりはしませんか。」

今は物思ひに沈んで、一秒の間に、婆が長物
語りを三たび四度、つむじ風の如く疾く、颯と繰返
して、うつかりして居た判事は、心着けられて、フ
ト身に沁む外の方を、欄干越に打見遣つた。

黄昏や、早や黄昏の森の中から其の色を浴びせか
けて、瀧を蔽へる下道を、黒白に紛るゝ女の姿、縁
の糸に引寄せられけむ、裾も袂も鬢の毛も、夕の風
に漂ふ風情。

「おほ、彼は。」

「お米でございますよ、あれ、旦那様、お米さん、」と判事にいふやら、女を呼ぶやら。お幾は段を踏にらすやうにしてずりと下りて店さきへ駆け出すと、欄干の下を駈け抜けて壁について今、婆さんの前へ衝と来たお米、素足のまゝで、繃帯ばかり、空色の袴に襟のかゝつた寝衣の形で、寢床を脱出した竄れた姿、追かけられて逃げる風で、あわたしく越さうとする敷居に爪先を取られて、うつむけさまに倒れかゝつて、横に流れて蹠踉く處を、

「あツ、」といつて、手を取つた。婆さんは脊を支へて、どツさり尻をついて膝を折りざまに、お米を内へ抱へ込むと、ばつたり諸共に畳の上。

此の煽りに、婆さんが座右の火鉢の火の、先刻からじよう成果てたのが、眞白にはつと散つて、女の黒髪にも婆さんの袖にもちら／＼と懸つたが、直ぐに色も分かず日は暮れたのである。

「お米さん、まあ、」と抱いたまゝ、はツ／＼

いふと、絶ゆげな呼吸づかひ、疲果てた身を悶えて、

「厭よう、つかまへられるよう。」

「誰に、誰につかまへられるんだよ。」

「厭ですよ、あれ、巡查さん。」

「何、巡查さんが、」と驚いたが、抱く手の濡

れるほど哀冷汗びつしよりで、身を揉んで逃げよ

うとするので、さては私だといふ見境も最うなくな

つたと、氣がついて悲しくなつた。

「確乎しておくれ、お米さん、しつかりしておく

れよ、ねえ。」

お米は唯切なさうに、あゝ／＼といふばかりであ

つたが、急に又た堪へ得ぬばかり、

「堪忍よう、あれ、」と叫んだ。

「堪忍をするから謝罪れの、何處を何う狂ひ廻つ

ても、私が目から隠れる穴はないぞの。無くなつた

金子は今日出たが、汝が罪は消えぬのぢや。女、さ

あ、私を頼め、足を頂け、こりや此の杖に縋れ。」

と蚊の呻くやうなる聲して、ぶつ／＼いふ其の音

調は、一度口を出で、唇を垂れ蔽へる鼻に入つて

やがて他の耳に来るならずや。異様なる持主は、其

の鼻を眞向けに、長やかなる顔を薄暗がりの中に据

彗、一道の臭氣を放つて、何時か土間に立つて彼の杖で土をこと／＼と鳴して居た。

「あれ。」 打てば響くが如くお米が身内はわなゝいた。

堪りかねて婆さんは、鼻に向つて屹と居直つたが、爺がクン／＼と鳴して左右に蠢めかしたのを一見すると、しりごみをして固くお米を抱きながら竦んだ。

「杖に縋つて早や助かれ。女やい、女、金子は盗まいでも、自分の心が汝が身を責殺すのぢやわ、たはけ奴めが、フン。我を頼め、膝を抱け、杖に縋れ、これ、生命が無いぞの。」 と洞穴の奥から幽に、呼ぶやう、人間の耳に聞えて、此の淫魔ほざきながら、したゝかの狼藉哉。杖を逆に取つて、うつぶしになつて上口に倒れて居るお米の衣の裾を八タと打つて、又打つた。

「厭よ、厭よ、厭よう。」 と今はと見ゆる悲鳴である。

「この、たはけ奴の。」
段の上ですツくと立つて、名家の彫像の如く、目

まじろきもしないで、一場の光景を見詰めて居た黒
き衣、白き面、清軀鶴に似たる判官は、衝と下りて、
ずつと寄つて、お米の枕頭に座を占めた。

威嚴犯すべからざるものある小山の姿を、しよぼ
けた目でぢつと見ると、予言者の鼻は居所をかへて
一足退つた、鼻と共に進退して、其の杖の引込んだ
ことはいふまでもなからう。

目もくれず判事は静にお米の肩に手を載せた。
軽くおさへて、しばらくして、

「謂ふことが分るか、姉さん、分るかい、お前さ
んはね、紛失したといふ其の五百圓を盗みも、見も
しないが、欲しいと思つたんだらうね。可し、欲し
いと思つた。其は深切な此の婆さんが、金子を頂か
されたのを見て、彼の金子が自分のものなら、老人
のものにしたいと、．．．然うだ。其處を見込
まれたのだ。何、妙なものに出會して氣を痛めたに
違ひなからう。むゝ、思つたばかり罪はないよ、假
ひ、不思議なものゝ咎があつても、私が申請けよう。
さあ、しつかりとつかまれ。私が楯になつて怪いも
のゝ目から隠してやらう。ずつと寄れ、さあ此の身

體につかまつて其の動悸を鎮めるが可い。放すな。」
と爽かにいつた言につれ、聲につれ、お米は震ひ
つくばかり、人目に消えよと取絶つた。

「婆さん、明を。」

飛上るやうにして、やがてお幾が捧げ出した灯の
影に、唯見れば、豫言者はくるりと脊後向になつて、
耳を傾けて、眞鍮の耳搔を悠悠とつかひながら、判
事の言を聞澄して居るかの如くであつた。

「安心しな、姉さん、心に罪があつても大事はな
い。私が許す、小山由之助だ、大審院の判事が許し
て、其の証拠に、盗をしたいと思つたお前と一所に
ならう。婆さん、媒約人は頼んだよ。」

迷信の深い小山夫人は、其の後永く鳥獸の肉と茶
断をして、判事の無事を祈つて居る。蓋し當時、夫
婦を呪詛すると云ふ捨臺辭を残して、我言恁の如く
違はじと、杖を以て土を打つこと三度にして、薄月
の十日の宵の、十二社の池の周圍を弓なりに、飛ぶ
かとはかり走り去つた、豫言者の鼻の行方が未だに
分らないからのである。

【完】